

ることに注意したい。万葉のそれを本歌だとする諸注の一致(全注釈を除く)といったことも考慮されてのことのようであるが、それにしても、これこそ、氏の言われる、合理的民謡解釈であり、氏が排撃しておられる抒情詩的歌謡観に根ざすものではないだろうか。氏が不自然であり、不合理であるとされるまさにその点こそが、すべてこの歌謡の古代民謡としての素性の正しさを物語るものだとはいえられないであろうか。重ねて言えば、現実に噂くらいで心中などしようと言う筈がないからこそ、また男が女に向かってそう言うからこそ、即ち現実的なインタレストを持たぬからこそ、氏の引かれた民謡などと同様、笑わせ歌としてうたわれた民謡なのだとはいえられないのであろうか。

次はこれもまた第六章の久米歌の問題であるが、氏がB群に分類しておられる歌謡の中の「撃ちてしまむ」の詞章を伴った歌についてである。氏はB群の歌謡が「天語歌」や「国栖の歌」と同様に、天皇に忠誠を誓う歌として宮廷儀礼の場に於て成立したもの(225)と正しく指摘され、かつまた第五章の中の「風俗歌の意義」に於てそれぞれの部が自

己の職掌に属する生産などをうたうのは、生産生活を歌うことが、すなわち天皇への奉仕の意味を持つからで、生産それ自体をうたうことが目的なのではない(p.203-209)ときながら、この「撃ちてしまむ」の詞章の意味だけは、文字通り主体的若しくは意志的に敵を打ち滅ぼそうというのだ(223)と解しておられるのは納得し難い。つまり私見によれば、戦闘を職掌とする久米部が、戦闘のことをうたうのは、他の部が生産をうたうのと本質的には同じなのであつて、この「撃ちてしまむ」の意味は、氏も引用していられる大伴氏の「辺にこそ死なぬ、のどには死なじ」という誓約と同じ意義をもつに過ぎないのだと思われる。つまり、この「撃ちてしまむ」は久米部の主体的な意志などではなく、天皇氏の部民たる久米部が、主人への忠誠を誓った言葉に他ならない。たとえば、久米歌の次のもの

みつみし久米の子らが  
垣下に植えし萩  
口ひびく我は忘れじ撃ちてしまむ  
の「忘れじ」を大系本の頭注に氏が言われる如く、宿敵に対する敵愾心と解すること

が、果たして可能であろうか。高木博士の提言を氏も是としておられるように、この「我」を久米部の族長と解し、この歌謡の歌われた場を考慮に入れるならば、その敵愾心はまさに自己を服属させた、天皇(氏)その人に向けられたものとなる他ないであろう。「忘れぬ」のは、自分達(祖先が)服属させられ事実と解さねばなるまい。その点で大系本の頭注に於ても、氏が「久米部は皇軍であるから」といつた従来の諸注の抒情詩的歌謡観に基づき素朴な解釈を、根本的には踏襲しておられるようなのは、やはり物足らなく思われる。

以上、浅学をかえりみず敢て無礼の言を綴つたのは、氏が折角すぐれた方法論を創造してゆかれながら、まだその実際の適用においては不十分な面があるのではないかと感ずるからに他ならない。もう少し論じ残した点もあるが与えられた紙数もとくに越えたので、ひとまずペンを置きたいと思う。粗雑かつ礼を失した評であることを、文中敬称を略したことと共にお詫びしておきたい。(昭和三五年十一月刊・A5判・四五六頁・一二〇〇円・三一書房)

狂詩の歴史は古い。しかし狂詩が隆盛したのは、蜀山人や銅脈などが出た明和頃からであろうか。そしてこれは明治になつても存続していたが、大正も十二年の大阪になお狂詩が生きつづけていたのである。それはまた文学が生活の中にあつたよき時代のこともあつたのである。

口上

近來狂詩大流行、猫杓子極ニ込大將、此度同人致申合、賑々敷欲ニ一堂ニ七月十日後四時、書林蔵部道順宜、一味徒党大寄合、風流先開銅脈忌、銅脈先生是醫師、狂詩壇上能廻匙、然有ニ一世無ニ二代、文墨世界事可悲。

由之而定適當人、立ニ机ニ二代ニ再欲、振、其人誰吸江博士、同業因縁難引身、二世銅脈賈銅脈、煩ニ同業欲慰魂、魄、同好諸君御賛成、続々ニ給、任、木履、

大正十二年七月

霞亭老人

狂詩

大橋 清 秀

翁病篤一座愜然久之

芦風同人会ニ飄亭ニ狼誇不ノ振酒易醒、傷春長歎老師病南禅寺畔烟雨冥

鳴東翼外飛、車行皆是一騎当千兵伴、中大本天大癩溪圍圭ニ好弟兄宵間廓、酒雪鳥醉愁、師臘心上人情、若先手顛、思在内描玉似、甄皆眼、

注曰

師を愁ふ臘心も春の宵 上人句  
行春の宵の間さびし廓酒 雪鳥句  
若先 若先生ノ略歳ノ称  
叱正  
四月念二 吸江祥  
甬大居士 虎皮下  
とあるのを見て、先日味方健さんから高安六郎博士のうたい本の研究のすぐれていることをきかされた時、わたしが高安六郎博士のような人はもう出ないかもしれないと言つたことを思い出した。  
現代の大阪には、もはやこのような人を産み出す温床がなくなつてしまつたのである。

その後、村田穆先生から昭和十年のころに、「諷刺家銅脈先生」(近世作家研究)所収)の執筆者である中村幸彦氏らと一緒に狂詩をつくつたりしたことがあつたとうかがつた。  
狂詩の歴史は、この事を最後として終焉してしまうのであろうか。